

## ミャンマーにおける言語教育

岡野賢二

1. はじめに
2. ミャンマーの公的教育制度
  - 2.1 基礎教育制度
  - 2.2 高等教育制度
3. 大学における言語教育
4. 外国語大学における言語教育
5. ヤンゴン外国語大学ビルマ語学科長 Yin Yin Than 博士へのインタビュー
6. 補遺～終わりにかけて

### 1. はじめに

本報告では報告者が2013年9月に行ったミャンマー連邦共和国(英語名: The Republic of the Union of Myanmar、以下「ミャンマー」)での現地調査の報告、ならびにその後の変化について述べる。

まず本科研における主要な課題であるヨーロッパ言語共通参照枠組み(CEFR)の状況について述べると、ビルマ語<sup>1</sup>教育に携わる教員からCEFRについての言及は一切なく、その存在についても知らないといった様子であった。後述するように、ミャンマーでは大学等で外国人に対するビルマ語教育が1960年代から細々と行われてきたものの、それは研究者(博士後期課程在学者)や外交官など、それを専門的に必要とする人々のみが学ぶものであり、学習者はその数も範囲も非常に限られていた。大学学部生レベルのミャンマー留学が行われ始めたのは1990年代中頃からであり、外国人に対するビルマ語教育の(政策上の)重要性に気づき、それに対する本格的な対策が取られるようになってからさほどの時間が経っているわけではない。そのためこの分野が今後大いに変化していくことは間違いない。従って本報告はあくまで報告者が現地調査を行った時期の記述であることをお断りしておきたい。

実際、発展著しいミャンマーは、教育状況についても報告者の出張後に相当の変化があった。その全てを把握することは困難であるが、報告者が見聞きした範囲内で補足をする。

### 2. ミャンマーの公的教育制度

ミャンマーの公的教育制度の概略について述べる。

---

<sup>1</sup> 原語 မြန်မာစာ [mjámà·zà]、မြန်မာဘာသာ(စကား) [mjámà·bà·dà·(zāgá)]、ဗမာစကား [bámà·zāgá]など。英語はBurmese(ただし近年Myanmareseという語彙もあるようだ)、日本語では「ビルマ語」「ミャンマー語」などと呼ばれる。本稿では「ビルマ語」に統一する。

ミャンマーでは基本的に公的教育は全て国立学校で行われている<sup>2</sup>。私立の学校は少なからず存在するけれども、それらの学校はあくまで「私塾」という扱いであり、その課程を修了することによって国が保証する教育を受けたこととは見なされない。また日本のように大学入学資格検定もないため、国立の学校を修了しない限り大学入学資格は得られず、高等教育を受けることはできない。以下、本節では公的教育制度に限って述べる。

ミャンマーの教育制度は基礎教育課程と高等教育課程とに大きく分けられる。基礎教育は日本の高校3年にあたる第10学年まで、高等教育は大学1年以上である。これに対応するように教育省には基礎教育局と高等教育局がそれぞれ旧首都のヤンゴン（Yangon）と上ビルマの中心都市である古都マンダレー（Mandalay）に置かれている。

## 2.1 基礎教育制度

基礎教育のシステムと標準年齢を以下に示す。

課程	学年	標準年齢
幼稚課程	幼稚	5
小学課程	1	6
	2	7
	3	8
	4	8
中学課程	5	10
	6	11
	7	12
	8	13
高等課程	9	14
	10	15

幼稚課程を入れて基礎教育課程は11年間で、大学入学時は16-7歳となる。なお基礎教育課程の学年は6月開始、高等教育課程の学年は12月開始である。

基本的に各学年の最後に試験が行われ、それに合格すると次の学年に進むことになる。そして基礎教育課程最終学年である10年生の修了試験は全国規模で行われる。これは大学入試の役割も兼ねている。大学、学部は入学最低点がそれぞれ定められており、第10学年修了試験合格

<sup>2</sup> 建前上は国民であれば無料で高等課程まで通うことができるようになっているが、実際には様々な金品を学校側や教師個人に渡す必要があるようである。

者は自分の得点で入学可能な大学、学部の中から希望のところへ入学申請をする<sup>3</sup>。

なお小学校、中学校、高等学校についての概念が日本とは異なるので少し注意が必要である。小学校とは小学課程のみ備えている学校、中学校は小学課程と中学課程を備えた学校、高等学校は小学課程から高校課程までの全て備えているのが一般的である。

## 2.2 高等教育制度

高等教育機関である大学は教育省（Ministry of Education）管轄の大学と、それ以外の省庁が管轄するものがある。これは1988年の民主化運動の際、学生がその中心的な役割を担ったことから、各大学を分断する意味で、医科大学は健康省（Ministry of Health）、工科大学は工業省（Ministry of Industry）、農業大学は農業省（Ministry of Agriculture）、文化大学は文化省（Ministry of Culture）というように管轄を教育省から移したとされる。現在教育省の管轄する大学は総合大学、各地方都市にある学位大学（Degree Collage、現在は大学 university に改組）、教育大学、外国語大学、通信教育大学などである。

総合大学は例えば旧首都のヤンゴンであれば、ヤンゴン大学、ダゴン大学、ヤンゴン東部大学、ヤンゴン西部大学、ダニン（タンリィン）大学がある。ヤンゴン大学は英領時代に創設された最も古い大学であるが、学生運動の中心でもあり、しばらく学部機能が停止されていた（教育施設としては大学院の機能のみに限定された）。その代わりにヤンゴン市郊外に上述のダゴン大学などが設立された。上ビルマのマンダレーでも状況は同じで、マンダレー大学に代わってヤダナーボン大学等が設置されている。

2011年に民政移管してからは教育界においても現場に裁量が少しずつではあるが移譲されるようになってきた。2013年12月よりヤンゴン大学、マンダレー大学は学部生を受け入れることになった。余談だが、ヤンゴン外国語大学はヤンゴン大学からほど近いところにある。もともとさほど人気のある大学ではなかったのだが、一般の総合大学が郊外にあって通学が非常に不便であるため、市内から楽に通えるヤンゴン外国語大学の人気が上がったという。

## 3. 大学における言語教育

ミャンマーの大学では文科、理科の別によらず、また管轄省庁によらず、全ての大学1、2年生は自国語であるビルマ語と外国語である英語を履修することになっている。それ以外の言語教科はオリエンタルスタディとしてのパーリ語と国文科（Department of Myanmar Language and Literature）における古典モン（classical/ancient Mon）語のみである。いずれも現在母語話者

<sup>3</sup> 多くの学生は自らが学びたい学部へ進学するのではなく、自己の得点で入学可能な最も上位ランクの大学、学部に進学することがほとんどである。入学後に「自らの希望と違う」として転学部をするケースも珍しくない。ただし転学部をするには、転学先の学部の定める得点に第10学年修了試験の点数が達していなければならない。なお第10学年修了試験は一度合格すると、再受験することはできない。

のいない死語である（現代モン語は今でも話されている）。要するに実践的な外国語としては英語しか正課として教育されていないことになる。

ヤンゴン大学をはじめとする総合大学には国文科と英語学科が設置されている。これ以外の言語が教育されているのはヤンゴン外国語大学とマンダレー外国語大学の2校だけである。

#### 4. 外国語大学における言語教育

ヤンゴン外国語大学は1964年に外国語学院（Institute of Foreign Languages、IFL）としてヤンゴンに創設された。これは大学教育を修了した者が対象で、大学ではなかった。設置の目的は実践的な外国語能力を習得させることである。つまり研究機関ではない。

1974年になって外国人に対する教育機関としてビルマ語学科を設置した（後述）。

大学（外国語大学、University of Foreign Languages、UFL）となったのは1996年で、その1年後の1997年にマンダレーにも外国語大学が設置され、ヤンゴン外国語大学（University of Foreign Languages, Yangon ; YUFL）、マンダレー外国語大学（University of Foreign Languages, Mandalay : MUFL）と、上ミャンマー、下ミャンマーの中心都市に外国語大学が揃うことになった。

両外国語大学は基本的に双子のようなもので、教育組織の構成は全く同じ、ということである。本報告者はマンダレー外国語大学関係者へのインタビューは行っておらず、以下ヤンゴン外国語大学について記述する。

ヤンゴン外国語大学には（原則）自国人のみが通う東洋語系の日本語、中国語、朝鮮語、タイ語と、西洋語系の英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語の計8専攻に加え、外国人のみを対象とするビルマ語学科とがある。

ここで教員について簡単に述べておく。ミャンマーでは大学教員人事は教育省が全て管轄していて、大学には教員についての一切の人事権がない<sup>4</sup>。教員はヤンゴン、マンダレーの大学と地方大学とを数年おきに異動をしながら昇進していくのが一般的である。

これに対しビルマ語と英語を除く外国語大学の教員はヤンゴン外国語大学とマンダレー外国語大学にしか異動先がない。よって多くの外国語大学教員はこの2外国語大学の間を行き来することとなる。またビルマ語の場合も、いったん外国語大学勤務となると、それ以外の大学に異動になることがあまりないようである。これは外国語大学の教育内容とそれ以外の大学の教育内容が全く異なるためであろう。

外国語大学教員の人事については他にも問題がある。一つはビルマ語と英語以外にミャンマー国内で博士号取得するための機関がないことである。現在、教授への昇進は事実上博士号取得が必須条件となっている。ところがビルマ語、英語以外は外国語大学以外に教育機関がなく、

<sup>4</sup> 2014年に法律が改正され、大学で教員の採用ができるようになった、という情報がある。すでに教員として勤めている者も教育省の雇用でい続けるか、それとも大学の雇用となるかを選ぶことができるということだが、詳細は不明である。また昇進等についてもはっきりしない点が多い。

外国語大学には博士課程が設置されていない（博士課程があるのはヤンゴン大学とマンダレー大学のみ）。そのため博士号取得者がいない言語の専攻学科では講師が学科長となるという極端なアンバランスが生じている。

## 5. ヤンゴン外国語大学ビルマ語学科長 Yin Yin Than 博士へのインタビュー

2013年8月にヤンゴン外国語大学のビルマ語学科長である Yin Yin Than 博士を訪ね、ヤンゴン外国語大学ビルマ語学科の状況について聞き取り調査を行った。そのインタビュー内容をまとめる。なお組織や教育体制について、基本的にマンダレー外国語大学にも当てはまる。

ヤンゴン外国語大学ビルマ語学科は外国人専用の学科である。ミャンマー国籍を有するものは（原則として）ここへの入学は認められていない（帰国子女に対する特別な教育体制等は取っていないようだ。また在外の子女については、第10学年修了試験は在外大使館でミャンマー国内と同様の試験を実施している。基礎教育課程の子供は通常、現地の小中学校等に通わせ、ミャンマー国内の教育内容については自主学習をするか、家庭教師をつけることで対応する）。

前述のようにヤンゴン外国語大学の前身である外国語学院の創立は1964年で、1974年に外国人に対する教育機関としてビルマ語学科を設置した。それまでは外国人留学生はヤンゴン大学で受け入れていたようだ。

外国語学院は1974年以来、海外の大学からの留学生、外交官などを多数受け入れてきた。日本からは外務省員、旧文部省のアジア諸国等派遣留学生制度による大学院生が多数ヤンゴン外国語大学で学んでいる。1974年以降、外国人は原則、外国語学院のみでの受け入れとなった<sup>5</sup>。というのもミャンマーでは基本的に国民にしか公的教育は提供しないことになっていたからである。

さて、現在ヤンゴン外国語大学ビルマ語学科には以下の3コースが設置されている。

1. Degree コース（4年間）：在ミャンマーの外国人が対象
2. Diploma コース（2年間）
3. Proficiency コース（1年間）

このうち Diploma コースと Proficiency コースがいわゆる留学のためのコースとなる。通常は Proficiency コースに入学する<sup>6</sup>。留学の最短期間は1年間で、これよりも短いコースは設置さ

---

<sup>5</sup> 1999年からヤンゴン大学、文化大学などで外国人（博士後期課程在籍者）の受け入れが一部許可されている。報告者は2000年から2002年にヤンゴン大学に留学した。また2010年頃から外国人の入学（留学ではない）も許可されている。現在、ヤンゴン大学ビルマ語学科に正式に博士課程に在籍する中国籍の学生が1名いる。

<sup>6</sup> 2012-3年度のビルマ語学科 Proficiency コースの学生数は194名。国籍別の内訳は日本14名、中国16名、韓国48名、タイ4名、ベトナム14名、ラオス2名、インド3名、バングラデシュ2名、フィンランド1名。正確な数は把握していないが、2013-4年度は中国人留学生が50名前後入学したとのことである。

れていない<sup>7</sup>。ここでは Proficiency コースについて述べる<sup>9</sup>。

Proficiency コースは1年間のコースで、初級、中級、上級に分けられている。入学申請は各国に置かれたミャンマー大使館を通じて行う。入学前にプレースメントテストが行われ、実力に応じて各級に振り分けられる。プレースメントテストについての詳細や振り分けの基準については特に言及がなく、不明であった。

前述のように高等教育機関は12月から年度が始まる。2セメスター制を取っており、第1セメスターが12月から3月、第2セメスターが6月から9月である。

時間割は月曜日から金曜日まで全く同じである。また科目はいずれの級も同一名である。

1 限	Listening/Speaking
2 限	Reading
3 限	Writing
4 限	Grammar
5 限	Myanmar Language for Special Purpose

“Listening/Speaking”、“Reading”、“Writing”、“Grammar”の4科目については独自に編まれたテキストがある。5限の“Myanmar Language for Special Purpose”という科目は特に内容が定められておらず、授業の運営は担当教員の裁量に任されている<sup>10</sup>。

セメスターごとに試験があり、合否を判定する。成績評価は「試験 60%」、「課題 20%」、「オーラル 20%」とのことであった。具体的な評価指標については Yin Yin Than 博士から特に言及がなかった。

また最初に述べたとおり CEFR については「全く知らない」とのことであり、ヤンゴン外国語大学に限らず、語学教育に CEFR が導入、または検討されているという情報は（管見の限り）ない。

1年間のコースに通い、試験を受けて修了となる。修了時には Certificate が発行される。コースは1年限りであり、上の級への接続はない。あまり多くはないが、更に1年通うケースもある。その場合はあらためて入学申請をすることになる。

## 6. 補遺～終わりにかえて

報告者が現地調査をした2013年を境として、ミャンマーの高等教育機関は大きく変革してい

<sup>7</sup> Yin Yin Than 博士によれば、これより短い期間のコースを開設する予定はないとのことである。

<sup>8</sup> 報告者が現地で調査した2013年頃からヤンゴン大学で外国人を対象とした短期コース（3ヶ月）が不定期に開かれるようになった。また同大学は海外の大学と協定を締結し、2014年よりショートビジットを受け入れている。2014年7月にはオックスフォード大学、同年8月は東京外国語大学（3週間、14名参加）がショートビジットを行っている。

<sup>9</sup> 教育内容については Proficiency コースと Diploma コースとほとんど差がないと考えられる。

<sup>10</sup> 留学経験者（上級クラス）の話によれば、新聞記事や小説などの講読をすることが多いようだ。

る。教育法が改正され、一部大学（基幹大学）には大きな裁量が付与されるようになってきた。ヤンゴン大学やヤンゴン外国語大学などが独自に海外の大学と協定を締結し、研究や教育の提携を大々的に進めている。

特にヤンゴン大学の変化が大きい。学生運動、政治運動の中心であったヤンゴン大学は1988年の民主化運動後に起きたクーデターにより成立した軍事政権によって合計10年以上にわたって閉鎖された。その間、郊外に代替の大学が多数建設され、学生はそちらに移されて、ヤンゴン大学は教育機関としての機能を完全に失ったかと思われた。一時はヤンゴン大学が消滅するという話もまことしやかに囁かれていたものである。

しかし報告者が在籍した2000年の7月からヤンゴン大学の閉鎖は解かれ、修士課程の教育が再開された<sup>11</sup>。

外国人に対する教育に限っていえば、博士後期課程レベルの学生は2000年頃から少しずつ受け入れるようになってきたが、2013年からは学術交流協定校から正式な留学が行われるようになってきている。報告者の把握する限り、2014年7月に英国オックスフォード大学、2014年8月東京外国語大学からショートビジットの学生を受け入れているし、2014年12月から中国の雲南民族大学から約40名の学生を、また東京外国語大学から3名の学生を受け入れている。これは1年間という長期の留学となる。

ただし言語教育の内容については、外国人に対する言語教育の伝統を持つ外国語大学に現時点でははるかに及ばない、というのが報告者の印象である。ヤンゴン大学ビルマ語学科の教員は海外での教育経験を持つものが多数いるが、教材はまだ編纂されておらず、カリキュラムも体系化もされているとは言い難い。

ただ外国語大学の教育があくまでビルマ語の言語運用能力のみ絞られているのに対し、ヤンゴン大学ではビルマ語の授業だけでなく、文学や英語などの授業にも出席することになる。さらにはビルマ語学科だけでなく、他の学科（人類学科、歴史学科など）の授業を履修するチャンスが与えられる可能性がある。つまり技能 skill だけでなく contents あるいは discipline を学ぶことができる点が外国語大学とは大きく異なるのである。

また外国語大学では外国人専用のビルマ語学科は、ミャンマー人の通う他の学科とは接点が一切なく、完全に断絶しているのに対し、ヤンゴン大学ではミャンマー人のクラスにも留学生は出席できる。ミャンマーの教育界は伝統的に外国人との公式な接触をさせたくない傾向があり、昨今のヤンゴン大学における変化はミャンマーの高等教育全体の大きな転換を如実に示していると言っていいであろう。

---

<sup>11</sup> 博士後期課程は大学閉鎖期間中も開かれていた。当時は大学教員のみが博士後期課程に入学することができた。つまり純粋な意味での「学生」はいなかったということである。大学教員は教員としての業務を行いつつ、博士後期課程の教育を受けていた。